

徂徠学派における認識論の変容について

—古文辞学から時、理、勢、人情へ

楊世帆

従来、先行研究においては、荻生徂徠の不可知論に対して、太宰春台は「合理的な思惟」を持つ、と論じられた。しかし、春台の世界観を考察すると、彼の考えでは、世界が活物であって、予測できない部分が存在している。徂徠の世界観と同一ではないが、無限な世界に対して、人間の認識能力は限界がある、という意識は両者の思考において、共通していると考えられる。

しかし、その無限な世界に対して、徂徠と春台の認識方法は大きな差異を持っていると考えられる。徂徠は「古文辞学」の方法を活用して、身体（からだ）の習熟を通して、聖人の道と一体化し、聖人の理解を介在して、無限な世界への認識を拡大する、と主張している。それに対して、春台は古文辞学の方法を拒絶した上で、世間の現象を「時、理、勢、人情」という四つのテーゼにまとめた。しかし、春台は世界が無限変化し、予測できないものであると考える以上、いくら現実をまとめても、人の認識は限界がある、と認めざるを得ない。この点に、徂徠と春台との発想における大きな差異が現れてきた。

また、春台は徂徠の弟子として、先王の礼楽刑政を重視するが、礼楽制度も限界があるというような論も説いている。そのような性格も上述の認識論と関わっていると考えられる。すなわち、制度の活用は現実そのものに応じて変化しなければならないと主張するが、現実の変化はまとめられない部分が存在している。現実と認識能力の緊張関係から、制度の限界が生じてくると考えられる。